

た。筆者は厳密な意味での「家譜」を考えたかたからである。

(6) 日本に現存する明代家譜には、嘉靖年間二部、隆慶年間一部、万暦年間八部、天啓年間一部、崇禎年間一部、計一三部ある。

(7) 中国の地方志の例を見ると、忠実に前志の記述を踏襲している場合もあるが、逆に前代の記事を改めている場合もある。それ故、明代の史実を考察する場合には、清代の地志よりも明代の地志を利用の方が有効であるのと同様、同一姓氏の家譜であっても、より古い家譜の方が歴史研究に役立つと思われる。

(8) 南炳文「永樂期の移民——広宗県の場合」一九頁。

(9) 中国譜牒学研究会については、中国譜牒学研究会秘書処編『中国譜牒学研究会々刊』(一九九一・一〇刊)があり、同研究会の成立以来の経過を紹介している。同会の会長は劉貫文、副会長は馮尔康、張海瀛、秘書長張海瀛(兼)の諸氏である。

(一九九二年四月、太原、山西人民出版社、A5判、五九〇頁)

陳柏堅主編

広州外貿兩千年

山根 幸夫

一九八七年九月、広州で「海上糸綯之路」學術研討会が開催され、多くの報告がなされた。それらの論文を各方面から検討し、補充・修正の上、広州文化出版社から刊行されたのが本書である。巻頭に、張伯華「鑒古觀今、啓迪未來——祝広州外貿兩千年」一書出版の一文、及び武増幹、鍾建明の序言が掲げられている。所載論文は次の通りである。

- (1) 秦漢前広州口岸海外貿易之蠡測 張一農(河北財經學院)
- (2) 沈睡了兩千多年的広州海上糸綯之路 陳幹強(広州市對外貿易局)
- (3) 漢代番禺的水上交通与考古發現 麦英豪(広州博物館)
- (4) 市舶使設立前之海外貿易管理 鄧端本(広州市社会科学院)
- (5) 略論古代広州外貿的對外開放 陳柏堅(広州市對外貿易局)

局)

(6) 中国古代對外貿易中有關貨幣問題探討 王貴忱・王天文

(中國錢幣學會廣東分會)

(7) 唐宋時期中國同西太平洋各國的友好貿易關係 夏秀瑞

(中國對外經濟貿易大學)

(8) 宋代廣州西域與番坊攷 黃文寬 (廣東省文史館)

(9) 船舶管理在海外貿易中的作用和影響——從宋元時期廣州泉州的海外貿易談起 陳蒼松 (福建泉州海關)

(10) 元明時期廣州的海外貿易 杞晨 (中山大學歷史系)

(11) 清代前期廣州的對外貿易 (一六四四—一八四〇年) 黃啓臣 (中山大學歷史系)

(12) 清前期廣州的中英茶葉貿易 楊仁飛 (廣東省社科院歷史研究所)

(13) 清代前期政府對廣州海外貿易的若干特殊政策及其影響 鄧開頌 (廣東省社科院歷史研究所)

(14) 試論鴉片戰爭後廣州港外貿地位的变化及其原因 程浩 (廣州港務局)

(15) 解放以來的廣州對外貿易 洪淮勝 (廣州市對外經濟貿易委員會)

(16) 廣州市對外貿易局組建初期情況的回顧 方人 (廣州市紡織品進出口公司)

(17) 廣州外經貿工作跨上一個新台階 李士堅 (廣州市對外經濟貿易委員會)

(18) 開放改革十年的廣州對外貿易 黃建中 (廣州市對外貿易總公司)

(19) 利用外資發展外向型經濟 施京茂 (廣州市對外經濟貿易委員會)

(20) 廣州市出口商品生產基地概說 熊文輝 (廣州市對外經濟貿易委員會)

(21) 廣州的投資環境以及有關外商台胞來穗投資的優惠政策 刁彥 (廣州市對外經濟貿易委員會)

(22) 實行承包經營責任制增強企業活力 溫少山 (廣州市紡織品進出口公司)

(23) 試論番禺縣對外貿易發展狀況及其對策 吳佳炎 (番禺縣對外貿易局)

以上、二三篇の論文は、秦漢以前から現在に至るまでのテーマを扱っている。先秦から唐宋までの時期を扱ったのは(1)〜(8)、宋元から鴉片戦争までを扱ったのが(9)〜(13)、鴉片戦争後の廣州の変化を扱ったのが(14)一篇、その後、現在の問題を扱ったのが、(15)以下の九篇である。執筆者も(1)、(7)の他は、殆どすべて廣州の人たちである。而も大学や研究所に属する学者よりも、廣州市對外貿易局、廣州市對外經濟貿易委員會、番禺縣對外貿易局、廣州市紡織品進出口公司、廣州港務局、廣州博物館等、実務と關係の深い部局

に所属する人たちが多い。殊に、(5)以下の現在の問題について執筆しているのは、すべて貿易の現場と関係の深い人たちである。今後の広州港における貿易の繁栄を意図して編纂された論文集に、この様な人たちが多数執筆しており、広州港の繁栄を企図していることは、興味ぶかいものがある。

筆者は、(9)から(13)に至る各論文について紹介してみた。陳蒼松「市舶管理在海外貿易中的作用和影響」は、宋元時代の広州・泉州両港の対外貿易における華やかな繁栄の跡を論じている。この時期の対外貿易の発展は、当時の政治、経済条件の他に、当時の市舶管理状況と密接な関係があり、市舶機構の設置、官員の奨懲、抽分、禁権などの管理制度が十分に行届いていた為であるとの著者の指摘は注目すべきであろう。

杞晨「元明時期広州の海外貿易」では、まず広州に発する海外貿易航路について述べ、アジア航路、欧州航路、アフリカ航路に分けて説明する。次に、広州で扱われた商品の構成を分析し、進口商品としては、宝物・布匹・香貨・薬物・皮貨等を挙げる。出口商品としては、手工業品が主であったという。それには紡織品・陶磁品・金属器皿・薬物・生活用具・文化用品(書籍・文具・楽器など)・食品類の七種を挙げ、更に具体的に詳述している。第三には経

営方式として、官府経営と私商経営の両種があったことを指摘している。明代の私商経営では、豪民が巨船を造って外洋に出て交易するものと、商人が合資造船して海外に出るものがあったと云う。第四に市舶管理の形式を考察する。元代については、出口する商船に対する許可証の発行、舶税の抽解、違禁商品の検査、舶貨の処理等を述べ、明代についても、勘合制度の確立、各国入貢の貢期・貢船・人数等、貢船の互市貿易の管理、舶税の徴収(品目による税率表を付録)等を述べている。最後に、貿易の社会的効能として、①手工業生産の発展を促進、②商業性農業の発展を加速、③貨幣経済の発展を促進、④城鎮の発展を促進、⑤中外の科学技術文化の交流を促進、の五点を挙げている。而して元・明時代における広州の海外貿易の発展が、次の清代における更に大規模な海外貿易を發展させ、更に有利な科学的基礎を提供した、と結論している。

黄啓臣「清代前期広州の対外貿易(一六四四―一八四〇)」では、清代前期における広州の対外貿易に対する考察を試みる。対外貿易発展の特徴として、(一)海外貿易航路の増加、(二)対外貿易港の拡大と貿易国の増加、(三)進出貿易船の増加、(四)進出商品種類の空前の増加(茶・生糸・綢緞・土布等)、(五)対外貿易品の流通量値の増長、(六)広州の外国商館建立、の諸点を挙げる。次に、広州における対外貿易

の新特点として、(一)英・米等西洋諸国が主要な貿易対象となる、(二)進出商品の構成に重大な変化が生じた、(三)近代的海関を建立し、厳格に对外贸易を管理した、(四)広州の对外贸易が中国の对外贸易を代表した、ことを指摘する。而して清代前期、広東の对外贸易が斯称に發展し、特色を示したか、その原因を次のように分析する。(一)經濟發展の必然の結果、(二)広州が優れた地理的位置と地理的形勢を有していた、(三)清朝は広州貿易に特殊政策を實行した、(四)広州は歴史上比較的完備した貿易管理制度を形成し、貿易経営に上手な商人を有していた、等の諸点を挙げる。

最後に、上述の如き広州の对外贸易の高度の發展の結果として、広東および中国全土に次のような積極的影響を生じたと主張する。

(一)広東新型手工業の興起と發展を促進した(特に製茶業・瓷器業・綿紡織業・紡紗業・染布業等)。

(二)広州と内地との貿易・交往を促進した。

(三)中外の科学技術と文化の交流を促進した。殊に西方諸国の科学技術と文化が貿易に随つて広州に伝入し、良好な影響を産生した。

楊仁飛「清前期広州的中英茶葉貿易」は、広州における中英間の茶貿易の發展過程を考察したものである。まず、中英茶貿易の發展を三段階に分ける。一六八五—一七八三

年は開拓段階とする。一七八四—一八三三年は、東印度会社と行商が貿易を壟断した繁栄段階で、一八三三—一八四〇年は、中英茶貿易の自由な發展段階としている。次に、茶貿易發展の若干の趨勢を指摘する。即ち、(一)茶の対英輸出の漸進的増長、(二)輸出茶の品種の漸増、(三)輸出茶の量的変化である。第三に、清朝の茶貿易政策を分析する。その特点是、①茶貿易を広州一港に限定、②行商が茶貿易を壟断、③茶の運輸路線を厳格に規定、④優惠的な関税、の四点である。第四に、広州中英茶貿易の特徴を次の如く挙げる。

(一)英国が逐次広州の茶貿易を壟断、(二)東印度会社と行商が壟断していた茶貿易は、英散商と中国茶商の自由貿易に転換(一八三四年以降)、(三)東印度会社と行商の關係の転換—茶貿易の主動權の変位。鴉片戦争前の中英茶貿易關係の転換したのは、行商が貿易の主動地位を喪失したことから生じたとしている。

最後に、中英茶貿易の發展が、中英貿易關係と、中英両国の社会經濟に与えた影響を考察する。(一)広州中英茶貿易の發展が、中英貿易關係を形成した。(二)茶貿易の發展が、広東地方の經濟繁栄と福建等の茶生産地区の茶業の經濟發展を促進した。(三)広州茶貿易の英国社会に与えた影響として、(1)茶貿易の繁栄が英国社会の消費機構と生活習俗を変化させた、(2)茶貿易の發展は、英国資本主義發展の為に大

量の資金を積累した、の二点を挙げる。但し、鴉片戦争後は貿易港としての広州の地位は衰落し、重心は上海へ転移した、と結んでいる。

鄧開頌「清代前期政府対広州海外貿易の若干特殊政策及其影響」は、鴉片戦争以前の清朝の対外貿易政策を二大時期、即ち海禁鎖関期（一般海禁と嚴厲海禁の二段階）と対外貿易開放期（多港貿易と広州一港貿易の二段階）に分けて考察する。清前期の貿易政策の特徴として、(一)貿易管理政策の中で、漸次広州が特殊重要地位を確立した、(二)清朝は特別に粵海関督を重視し、皇帝は自己の腹心を任命した。(三)関税を減少し、外国商人の広州へ来て貿易するのを優待した、(四)清朝は広州よりも澳門における貿易を優遇したの四点を挙げる。而して清朝はなぜ広州を開放して、特殊な貿易政策を実施したかを考察する。それは(一)西方殖民者の通商根拠地——東南亞諸國に接近していたこと、(二)広州は海外貿易の悠久の歴史をもち、貿易にすぐれた人才を有したこと、(三)広州は百貨匯集の区で、清朝に巨額の関税を納め舶来品を提供できたこと、(四)西方資本主義の來華貿易は先ず広州で進行したこと、の四点を挙げてゐる。

右の如き特殊貿易は鴉片戦争前の広州貿易の發展に一定程度有利であり、当時の広州、乃至広東全省の社会經濟に多方面の影響をもたらした。即ち、(一)対外貿易の發展は、

広州乃至広東全省の經濟繁榮を促進し、商業を發展させた。(二)広州における対外貿易の特殊地位によつて、広州と他省との經濟關係が十分機能した。(三)広東と世界各國との經濟・文化交流を強化し、広州を当時中西文化交流のなごめとした。当然、清朝より言えば、広州における貿易特殊政策の実施は、国家財政の収入を増加させるのに大きな役割を果したと論じてゐる。

最後に、程浩「試論鴉片戦争後広州港外貿地位的变化及其原因」は、私が最も興味をもつた論文である。著者は鴉片戦争後の広州貿易を二期に分け、前期は一八四三—一八五二年とし、広州貿易が漸次下降し、従來の中心的地位は弱化したとする。後期は一八五三年以後で、広東の地位が上海にとつて代られたとする。それを具体的な統計を挙げて詳しく論証する。それでは広州の地位にどうして一大変化が生じたのか、その理由は西洋資本主義諸國が中国に対する經濟侵略の重点を華中、殊に上海へ移した結果だと云ふ。具体的には、(一)上海の興起が広州の地位を削弱した最大の原因であり、①長江デルタ經濟は、珠江デルタ經濟よりも一層發達してゐた。②上海の後背地は広州のそれよりもずっと広闊であつた、③上海の地理的条件は、広州よりもはるかに優れていたと論ずる。

(二)廈門、寧波、福州が相次いで開港されたことも、広州

の地位を削弱した重要な一因であるとする。更に(三)香港の割譲は、広州貿易に重大な打撃を与え、広州貿易が日々減退した一因であるとし、その主要な損害を具体的に列挙する。①香港の地理的位置、交通の便宜により、割譲後急速に極東における英国の商業中心地となった。②割譲後、英国の銳意経営により、良港が辟かれ、各国商船の自由進出を許した。③英国は香港に設關取税し、此処を経過する船舶より収奪したので、香港貿易は一時衰減した。④江西↓広州、湖南↓広州の二本の商品出口ルートが改変され、広州に集まる商品がいちじるしく減少した。但し、③は広州貿易の減退とは直接関連がないのではなからうか。

著者は、以上の如き考察によつて、鴉片戦争後に広州貿易の地位が減退した原因は明らかである、としている。更に、第二次鴉片戦争の結果、西方資本主義国の經濟侵略が、長江以南のみでなく華北及び内地にも侵入し、殊に天津・漢口や、長江流域の各港が相次いで開放されたことによつて、益々広州の地位は衰落したと論じている。

著者は以上の如く論じながらも、広州対外貿易中心は、四〇年代に直ちに他の貿易港―殊に上海へ移らなかつたのは何故か、という点を問題にする。而して、(一)西洋資本主義国家が新しく開放された各港について、余り熟悉しておらず、広東にもまだ活動の余地があつたので、広東貿易を

保留し、新しく開放された各港に碼頭・倉庫を建設していた。(二)五港通商初期には、広東商人は繼續して対外貿易の主要地位を確保しており、広州の官憲も八方手を尽して広州貿易の保持にとめたので、広州貿易は急速には後退しなかつたと云う。更に重要な点は、広州は当時世界最大の都市の一つであり、中国最大の商業市場であり、商業基盤は堅固で、その地理的条件もすぐれていたから、四〇年代はなおその地位を保持できた。然し、五〇年代には上海にとつて代られたけれども、広州は依然として対外貿易の重要港であつた、と強調している。殊に華南地区では中心的地位を占めていたと云う。

(四)以下の各論文は、解放以後の広州の対外貿易について論じている。論文の著者も、対外貿易委員会、対外貿易公司、対外貿易局などに勤務する実務にくわしい人たちのようである。彼らは過去の事実を解明するのではなく、広東の対外貿易の実態を分析すると共に、更に広東貿易を發展させるためには、どのような方法を採るべきかを論じている。それ故、本書の前半部は広東貿易の歴史的推移に重点をおいているが、後半は現在の広東貿易を發展させるには如何にすべきかと云つた論点を中心としている。更に言えば、前半の歴史的展開の考察を踏まえて、今後の対策を如何に進めるべきかを論じているようである。

編者陳柏堅氏の「後記」には、次の如く述べている。

広州対外貿易の歴史は悠久である。二千余年来、広州は中国対外貿易の「経久不衰」の重要貿易港であり、又世界的な海港都市である。中華人民共和国成立以後、中国輸出商品交易会の所在地でもあった。広州は古来、対外貿易と中外文化交流を促進する上で、重要な貢献をした。歴史経験を総括し、特点を認識し、規律を探索し、未来を予測するために、広州外貨史志編纂委員会は一九八七年九月、広州で「海上絹の路」を中心とする學術研討会を開催した。北京、泉州、広州等の地の教授・專家・学者と、豊富な経験をもった貿易の実際工作者が、この研討会で多年心をくわいて研究した學術論文を宣讀し、少なからざる有益な意見を發表した。本書に収める二六篇の論文は、古より現在に到る広州、特に開放・改革の十年間の広州貿易機構の設置、輸出商品の構成、貿易政策から国際交流等の方面の特徴を探討した。論文の排列は、年代の古い順序に並べた。

尚、本書の出版工作は、広州市対外經濟貿易委員会と広州市対外貿易局の指導と関心を得て、広州紡織進出口公司、広州經濟技術開發環宇企業公司及び広州市各專業外贸公司の絶大なる支持と援助を蒙った。いわば、經濟界の全

面的な援助の下に、本書の出版が成しとげられた。広州港の貿易の發展を願う經濟界と学者との協力によって、本書の出版が実現したのである。

本書が出版されたのは、一九八九年三月のことであるが、広州文化出版社から刊行された為か、日本への輸入はそれ程多くなかったのではないかと思われる。実は、私も本年八月、西安で開催された明史国際學術討論会に出席した際に、偶々本書の主編者である陳柏堅教授より一本を恵与されて、本書の存在を知った次第である。刊行年がやや古くなっているが、本書の存在をわが学界に紹介するため、敢て筆を執ったわけである。広東貿易の歴史に興味のある方、今後の広東の發展に関心のある方に、一読していただきたいと考えて紹介したわけである。

(一九八九年三月、広州文化出版社、広州、B6版、四一六頁)